

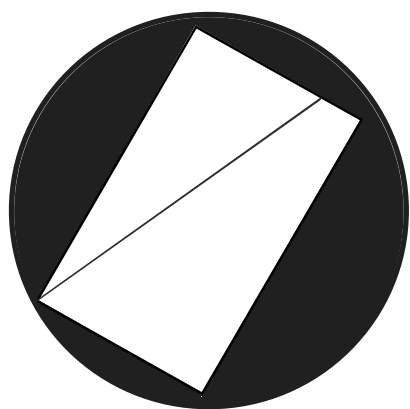
A + J Report

Asia + Japan

Research Center

Nov
2001

2



ASIA-JAPAN RESEARCH CENTER
KOKUSHIKAN UNIVERSITY

CONTENTS

三好 正也 卷 頭 言

第3回シンポジウム 活動レポート

イベントスケジュール イ ン フ オ

卷 頭 言

実現に向けその第一歩を踏み出しつつある東アジア経済共同体

アジア・日本研究センター運営委員
株式会社エフエムジャパン(J-WAVE)
代表取締役会長兼社長 三好 正也
(元・経済団体連合会 事務総長)

先頭を走っていた米国経済もITバブルが崩れ、にわかにかげを失いつつある。その影響はたちまち全世界を覆い、世界的レベルでデフレが進歩している。そこへ米中枢同時テロの衝撃が加わり、視界不良の度合はさらに高まった。日本経済も2年続きのマイナス成長を避けられそうもない。暗いニュースに事欠かぬ今日此頃であるが、そうしたさなか、もしかしたら21世紀はアジアの世紀になるかも知れない、そのなかで日本も重要な役割を果たすことを求められるかも知れない、と直感させるような一連の出来事がここ1ヶ月ほどの間に次々と新聞報道されている。

最近の新聞報道にみる東アジアにおける
自由貿易協定交渉の動き

10月13日の朝日は自由貿易協定(FTA)を柱とする経済連携協定の締結に向けた日本とシンガポール両国政府の交渉が大筋決着し、年内に調印、来年4月発効の見込み、日本のFTA締結は初めてである、と報じた。同紙はまた、日本はFTA締結に向けて韓国と民間有識者の勉強会を発足させているとも述べている。

これを追うように10月30日付日経は、11月5日からブルネイで開催されるASEAN諸国と日本、中国、韓国の首脳会議に向け、関係国の有識

者がアジアの経済統合を急ぐべきだとの提言を出す予定と報じている。

さらに11月1日に同紙は、今月に開催されるA S E A N・中国首脳会議において自由貿易協定の交渉開始に向け話し合いが行なわれるとの記事を掲げている。

日本における地域経済統合に関する関心の消長

筆者が直感という言葉を使ったのには理由がある。長年にわたる経団連のキャリアを通してアジア経済共同体の概念とのおつきあいも半世紀に及んでおり、その間、浮んでは消え、話題になっては忘れ去られた数多くの提案や構想をひとりの学徒として追ってきた経緯があり、今回の一連の報道は抽象論ではなく関係国政府の政策アクションに直結しうる内容であるとみただからである。

二、三の個人的回想を紹介してみたい。1954年の秋、その年経団連に職を得たばかりの筆者は、上司より東アジアに通貨決済同盟を創設することのフィジビリティについてレポートをまとめよとの指示を受けた。あちこち専門家に聴いて回り、文献をあさり、結論は政治的にも経済的にもその実現可能性はきわめて低い、すくなくとも30~40年経たないと現実的なイシューとはならないのではないかと結論した。

当時、西ヨーロッパにおいては炭鉄共同体や欧州決済協定が発足し、やがて4年後の1958年には欧州共同市場（関税同盟プラス若干の経済統合）が発足する。わが国においてはマスコミや学界に一種のブームが生じた。経団連にも欧州共同市場特別委員会が設けられ調査活動がはじめられ、1962年と65年の2回にわたり石坂泰三経団連会長を団長とする訪欧使節団が派遣された。筆者も事務局担当者として参加した。その後も欧州経済統合が新局面を迎えるたびに大々的な報道が行なわれてきた。

二国間あるいは地域ベースの経済統合体形成にはいくつかの段階がある。第一の段階がF T A（自由貿易協定）であろうか。ついで関税同盟（域外諸国に対し共通の関税と通商政策をもつ）。さらに独禁政策などの産業政策や農業補助金政策の統合を進める経済同盟。もっと進むと通貨同盟の段階にまで到る。究極的には欧州連合のように政治統合をめざすケースも現れる。欧州連合の場合は恒久平和の欧州大陸を実現しようという政治的意思が先行し統合のプロセスが始まったのであ

るが、それでも、現在みる高度の統合体をかたちづくるまでにほぼ半世紀を費やしたことになる。

こうした欧州の統合体形成の歩みを遠望しつつ、わが国の官民各分野においてアジア太平洋地域における地域経済統合体形成の可能性を論ずる数多くの著作や論文がしるされてきた。最も人口に膾炙されてきたものとして現一橋大名譽教授小島清先生が30数年前に世に問うたアジア太平洋自由貿易地域論を挙げることができる。

にもかかわらず、W T O・I M F体制の堅持増進を対外経済政策の基本としてかかげてきたわが国政府は、近隣アジア諸国との間にF T Aの締結を進めることにほぼ一貫して消極的な態度を示してきた。

とり残された東アジアも漸く初動の態勢に

しかし、足並みを揃えてきたリーダー国の米国もカナダ、メキシコとN A F T A（北米自由貿易協定）を発足させ、すでにかんがりの実績をあげるに至っている。アジアではA S E A Nの創設と拡大があったが、世界を見渡すと東アジアの日本、韓国、中国だけが地域経済統合の大きな流れからとり残された恰好になってしまった。

何よりも東アジアの多様性、各国経済間の格差、そして共通の政治的意思の欠落、さらに日本の農業問題の例にみられるように国内産業の保護を絶対視するような国内政治風土などが地域経済統合論議を夢の段階に留めてきた。

近年に至り、グローバリゼーションの浸透ぶりは東アジアにおいても顕著なものがあり、国際競争が激化するなか、わが国企業によって研究、開発、設計、組立等の各過程における東アジア諸国との国際的な分業、補完体制が強化されつつある。並行して中国を含めた東アジア諸国においてさらなる自由化、開放化をめざした構造改革が進展しつつある。

東アジアにおける地域経済統合は経済実体の現象としての側面に加え、さまざまな政治的意思と思惑の側面が加わり、初動の態勢を整えつつある。勿論、10年きざみの時間を要する課題ではあるが、前記した政府間交渉に続く動きがゆっくりとではあるが、次々と表面化し、明るいニュースとなって人々の耳目に達するようになることを期待している。

(11月5日記)

第3回シンポジウム “アジアから見た日本”

A J 活 動 レ ポ ー ト

今年6月に開催した初の公開シンポジウムに引き続き第3回のシンポジウムを“アジアから見た日本”と題する統一テーマのもと、10月5日にアジア・日本研究センターが置かれる世田谷キャンパスにおいて開催した。このシンポジウムは、(社)世界貿易センターの後援を頂き、ウィークデーの開催にも関わらず、大学関係者のみならず広く各界にわたる100余名の参加者のもと開催された。

冒頭、三浦信行・本学学長、当センター長より、アメリカでの同時多発テロとその後の一連の動向にふれ、文化や宗教の違いから起きる諸問題が続出している中、日本としては今後のアジアとの共生を重視しなければならないとの視点から開会の挨拶が行われた。それを受けるかたちで、西原春夫・理事長より、センター設立のきっかけとその目標、さらには後に行われるパネルディスカッションのテーマに沿った基調的な講演が行われた。

人類の歴史を見直すと、ある一定の法則的発展が見られることから、過去から現在、現在から未来を展望すると50～100年ぐらいの幅で予測が可能であることが紹介された。この観点から21世紀の世界を予測するにあたって、欧州の統合運動の過程を観察し未来を展望すると、人類は21世紀の終わり頃には、おそらく国境はなくなっていないが、世界連邦のような形になっていくであろうことが推測される。その世界連邦の成立の前段階を考えると、欧州のような地域国家連合の形成がもっとも望まれるかたちとなろう。従って、21世紀の前半は地域国家連合ができる時代であり、日本を取り巻く地域国家連合の単位はアジアになると考えられる。

本大学が歴史的にアジアとの関係が深い大学であることを考えると、来年4月の開設をひかえる“21世紀アジア学部”はこういった概念を具現化する組織としてもっともふさわしいのではないだろうか。さらに、21世紀はアジアという地域が一つのかたまりとして世界史に登場する初めての世紀になるであろう。しかし歴史がこのような流れを歩んでいるのに、現状をみると相互理解のなさが浮き彫りにされる。大学でも、東南アジアを対象とした研究を行っている学部がないことから、今後アジアの相互理解の進展、アジアの共通課題の解決が重要となり、その任に21世紀アジア学部、さらにアジア日本研究センターがあたっていくことが強調された。

基調講演の終了後、パネルディスカッションが行われた。ここでは、三浦 宏一・当副センター長、教授をコーディネーターとして、アジアと日本の関係をふまえて、今後のアジア-日本関係の帰趨を共通テーマとして、それぞれの講師の経験などをふまえたディス

カッションが展開された。

まず、中国大連出身の北海学園北見大学商学部専任助教授の 志強 氏より、経済力などの日本の長所を評価しながらも、日本の文化の受信と発信のアンバランスが指摘された。日本人は中国を中心として様々な文化を摂取し、それを日本の独特の生活文化にマッチさせてきた歴史を有するが、この日本文化が世界に知られておらず、今後アジアとの関係を考えるならば、外に向けた文化の発信に力を入れなければならない。また、国際化とは相互理解が必要不可欠の条件であり、これは他文化の理解だけではなく、自国の文化を相手に理解してもらうように努力しなければ、真の国際化とはいえないことから自国文化の外への紹介が重要とされることが強調された。

次に、韓国出身で現在(株)韓国リクルート東京支社長の 申景浩 氏より、日本と韓国の関係、今年8月の首相靖国公式参拝問題、教科書問題など現下の話題も交えながら、ここでは特に経済面から見たアジアと日本の関係について述べられた。日本にとって貿易相手国としての中国・韓国・台湾など極東アジアは重要な市場であり、日本の資金を確保し、ライフラインにもつながることから、さらに密な共生関係を歩まなければならない。しかし、明治以来日本人の視点は欧米一辺倒であり、特に戦後の安全保障面でのアメリカとの関係、サミット、G8を中心とした外交・経済問題でも欧米一辺倒の姿勢の是正が、今後の課題として指摘された。

最後に、当研究センター研究員・助教授の清水 麗 氏より、台湾と中国、日本の外交史を機軸として講演が行われた。まだ記憶に新しい、春先の李登輝訪日問題を取り上げ、この問題に対する日本の外務省の対応に反日派だけではなく親日派からも不満が高まっており、さらにはこのことが台湾の政界にも非常に大きな影響を与えたことが強調された。このように、外国、特にアジアから見た日本を考える際に、各国・地域の政治情勢がその日本観に多分の影響を及ぼすことから、それら日本観を固定のものではなく、政治状況が反映されたものとして見なければならない。さらに、これも先述の訪日問題に絡めて、21世紀に重要性を増すであろう台湾-中国-日本の関係を考えると、今後日本は悪い意味ではなく、良い意味でのダブルスタンダード、二重外交の姿勢が必要とされるのではないかと問題提起がなされた。

パネラー各氏のプレゼンテーション終了後、会場からの質疑も含め活発なディスカッションが行われ、特に今後の日本が取るべき立場、またアジアにおける日本理解の課題など、次回シンポジウムへ引き継がれるべき問題などについても盛んに議論が交わされた。

I n f o r m a t i o n

イベントスケジュール

◆
活
動
予
定
◆

第4回シンポジウム 開催 “アジアにおける日本理解”

第4回目のシンポジウムは、京都市立芸術大学学長、国際日本文化研究センター所長を経て、現在同センターの顧問をおつとめの梅原 猛先生を中心として、“アジアにおける日本理解”と題して11月9日午後2時より学士会館320号室にて開催します。梅原先生の特別講演“東アジア文化と日本”の後に総合芸術家の野村万之丞氏、東京成徳大学 人文学部 教授の王 敏 氏、梶原 景昭・国士舘大学 21世紀アジア学部 学部長(予定)等をお招きしてパネルディスカッションを開催します。皆様方多数のご参加をお待ちしております。

第3回AJセンター勉強会 開催

本年8月よりスタートしたセンター公開勉強会の第3回として、当センター教授 荒木 美智雄（国際宗教学会常務理事）を講師として、『都市空間の危機と宗教』と題し、アジアの宗教と倫理を中心とした勉強会を下記の要領で開催いたします。

日時・場所 11月30日（金）午後2時～4時
国士舘大学 世田谷キャンパス5号館3階 大会議室
講師・演題 荒木 美智雄 当センター教授 『都市空間の危機と宗教』

第4回AJセンター勉強会 開催

引き続き第4回の勉強会は、当センター教授 小山 皓一郎 を講師として、9月アメリカで発生した同時多発テロと、その後の国際情勢の動向をにらみ『イスラムとテロリズム』と題する勉強会を開催します。

両研究会とも皆様方のご参加をお待ちしております。

参加ご希望、お問い合わせは下記センターまでお願いいたします。

日時・場所 12月11日（火）午後2時～4時
国士舘大学 世田谷キャンパス5号館3階 大会議室
講師・演題 小山 皓一郎 当センター教授 『イスラムとテロリズム』

第5回シンポジウム 企画案内

今年12月の出版を目前にひかえたアジア・日本研究センター編集による<アジア21>シリーズの刊行を記念した新春シンポジウムを、2002年2月下旬の開催を目途として企画中です。詳細が決まり次第ご案内申し上げます。

◆
事
務
局
よ
り
◆

出版物のご案内 — “アジア21” シリーズ —

来年4月に開設予定の“21世紀アジア学部”に先立ち、アジア・日本研究センター編集による<アジア21>シリーズの第1弾として、各界を代表するアジアとのかかわりの深い方々と西原春夫当センター代表との対談をも交えた第1巻『21世紀アジアの可能性』、気鋭のアジア研究者による第2巻『21世紀アジア学展望』を12月下旬の刊行を目途に準備中。

国士舘大学 オープンキャンパス

国士舘大学第4回目のオープンキャンパスが、2001年10月27日 国士舘大学世田谷校舎、鶴川校舎で開催され、関東圏の高校生を中心として多数の参加を頂いた。

事業活動・出版物等のご報告